

曹洞宗の大本山永平寺を開かれた道元禪師は、鎌倉時代の西暦一二〇〇年、京都で生まれました。八歳の時に母を亡くし、幼い道元禪師の心にどれほどの影響があったかを考えますと、その精神的負担は大きかったと思われます。母を亡くしたことによりこの世の無常を感じた道元禪師は、僧侶となる決意をされたのです。

両親なき後、仏教の勉強を始め、十三歳の時に比叡山延暦寺で修行をされていた叔父のもとを訪れました。

十四歳で比叡山の僧侶となられた道元禪師は、

「本来本法性 天然自性身（ほんらいほんぽっしょう てんねんじしょうしん）」

〈本来、天地万物すべてが清浄で、人間は悟りの世界の中にいる〉

という言葉の意味に大きな疑問をいただきました。人間がもともと悟りの世界にいるならば、どうしてさらに修行をするのか、という疑問です。先輩達に聞いても疑問を解決することができず、ついに道元禪師は二十四歳の時、その答えを求めて中国へ留学します。

そして、お釈迦さまの正しい教えを伝える師匠である如浄禪師に出会い、坐禅修行を続けるうちに答えにたどり着かれたのです。それは、今まで自分が日本で行ってきた学問中心の仏教とは全く違い、「坐禅を中心とした修行がそのまま悟りである。」というものでした。

日本に戻られた道元禪師は、『正法眼蔵』をはじめ数々の著述をされました。

道元禪師は数多くの著述を通して、坐禅修行を中心とした生活すべてが修行であり、その修行生活が悟りの姿であるためには、どのように生きるべきかを懇切丁寧に説かれたのです。

道元禪師の和歌を紹介いたします。

「草の庵に ねてもさめても 申す事 南無釈迦牟尼佛 憐み給へ」

とても厳しい修行を行っていたであろう道元禪師ですが、その心の根底にはすべてのものに対する慈悲の心があるのです。